



Interview

「ドン・キホーテの大冒険」
1982年初演時。右側がサン
チョ・パンサ役の山根さん

人形劇団ポポロの劇団設立40周年記念作品「ドン・キホーテの大冒険」を新宿の全労済ホールで観た。夢見る騎士ドン・キホーテとその従者サンチョ・パンサが繰り広げる奇想天外な物語。この作品の演出も手がけた山根宏章さん(75歳)はサンチョ・パンサ役で出演。一度見たら忘れられないような丸いペしゃんこ顔の人形を頭に被り、コミカルな動きで熱演。伸びやかで、よく通る声ステイジに響いていた。

初演が1982年、その時の人形たちがすべて保管されていたので、それを手直しし、30年の時代を超えて復活させたもの。個性的なキャラクターの人形たち、スペイン舞踊あり、劇中劇あり、子どもから大人まで、ステージで繰り広げられる、ダイナミックな人形劇の世界を大いに楽しんでいた。

人形劇との出会い、そして劇団設立

人形劇団ポポロの脚本、演出を手



代表作のひとつ「鬼ひめ哀話」
地唄・琴・三弦とともに演じられる



友人から「天才人形役者」と評される山根宏章さん

がけ、人形劇役者も兼ねる山根宏章さんの原点は出身の鳥取県で、当時盛んだった青年団の芸能にある。

村芝居や人形芝居に小さい頃から親しんでいた。大阪にでて電気屋の丁稚奉公をしていた頃、人形劇団クララテの誘いを受けていた兄の身代わりとして、劇団を訪れた時、「これ読んでみてんか」と台本を渡された。訳も分からず読んでいると、周りから「うまいやんげ」という小声が。「思えばこの『うまいやんげ』が命取りでしたね。



事務所兼稽古場前で作業中のスタッフ

以来55年『うまいやんげ』に乗せられた人生を歩んできましたから」と山根さん。

こうしてクララテに入団したのが19歳の時。夢中で人形劇役者の修業を積んだ。8年後に上京し、人形劇団ブークに入団。劇団が大型化するにつれ、もっとライブ感ある小さな芝居を作りたい、という思いで独立した。自分の城を求めて、高円寺から移り住んだ小平の家の四畳半を拠点に、一人での立ち上げ。こうして1972年7月に人形劇団ポポロが誕生したのだ。

当時は上演の際も一人で何役もやるので、人形をイスにくくりつけて演じたそうだ。この頃はテレビ出演も多く、

「うまいやんけ」の 一言がきっかけで 人形劇ひとすじ55年

人形劇団ポポロ 代表 山根宏章さん

人形劇団ポポロ創立40周年・

山根宏章55周年記念公演

人形劇「耳なし芳一」

11月18日(13時30分) 19日(19時)

20日(11時30分)

武蔵野芸能劇場(料)4800円

全席指定

(申)042(344)3389

ポポロチケット係

全国を巡る多彩な活動

ピンポンパン(フジTV)やパンボロリン(NET・当時)、NHK教育テレビ、など5局くらいをかけたこと、たこともあった。84年から1年間はNHK総合テレビ「ひげよさらば」で主役のヨゴロウザ役で出演。家庭では奥さんと共働きのため、「私が長男をねんねこ半纏でおぶって、バスで保育園へ通ったものです。子育て、自分育て、劇団育てが一緒という時期で、慌たしい日々でした」と振り返る。

徐々に劇団員も増え、1981年には東村山市萩山に事務所と稽古場を構えることができた。幼稚園・保育園・児童館・公文協・教育委員会・子ども・おやこ劇場・演劇鑑賞教室・さまざまなイベントでの上演など活動の幅を広げていった。「ばけものづかい」「プレーメンの音楽隊」「ぞうの鼻はなぜ長い」など、かつてポポロの人形劇を見たことがある方も多いう。

北海道から沖縄まで、地方公演も多彩な活動を展開している。昔は月に20日間も地方へ出かけ、旅から旅への連続だった時期もあるけれど、時代は移り、今は単発の上演がほとんど。浜松からいまでは日帰りですでかける。それだけ人形劇をとりまく状況も厳しくなったと言えるのかもしれない。

かし山根さんにとってうれしいのは、もう37、8年間も毎年、上演が続いている長野県佐久市の保育園や所沢市の幼稚園があるということ。「夏休み」といえばポポロの人形劇」と楽しみに待っていてくれる子どもたち。もう親・子・孫3代にわたるお客さんもういるという。

「人は人形に対しては遠慮がないんですね。身構えて見なくて済みますし、人形相手だと安らぐし、安心するのです。ITの時代といっても人の心に直接かかわりあえ、心の領域を広くしてくれるものだと思います」

小さなスペースから大ホールまで、規模と観劇対象者に合わせて、さまざまな演目が用意されている。プロの音楽家と人形劇との楽しいコラボレーションもあり、ピアノやマリンバ、トロンボーンなど生の音楽と人形とが競演。「鬼ひめ哀話」など高学年や大人むけの演目には琵琶や琴、三味線など邦楽の演奏がつく。ポポロの人形劇はあらゆる可能性と工夫が凝らされた、山根さん渾身のステージだ。2008年「14ひきのひっこしだ」、2009年「じごくのそうべえ」で厚生労働省児童福祉文化財として連続で受賞、推薦された。

人形劇を若い世代へ届けたい

萩山にある稽古場を訪ねた時、建

物の前で舞台装置を製作中の男性たちが：「あれっ、この前見たドン・キホーテ役の人では？」稽古場に入ると女性スタッフがミシンで衣装を縫っていたり、小物を作っていたり、みなさんが作業の最中だった。そして周りにはたくさんの人形たち。

現在スタッフは11人、ほとんどの人が演じ手も制作も営業も兼ねているのだとか。やれることはすべて自分たちの手で、スタッフの人形劇への愛情が感じられる場だ。新年にはここで地元の子どもたちへ向けて、お年玉公演を実施。もう30年も続いている。

「子どもたちだけではなく、20代から30代の若い人たちへも発信して届けたい。人形劇の脚本を書ける人が少ないので、ここが育っていけば充分人形劇に将来性があります。街角に人形劇場があつて、大人も子どもも身近に楽しめるというと思います」

年齢を全く感じさせないあくなき情熱、その元気の素は「劇団が自分を働かせてくれるから」だという。音楽大学出身の二人の息子さんスタッフがとして、しっかりと支えている。

11月に開かれる劇団創立40周年記念公演はまた、山根さんが人形劇を始めて55周年の記念公演でもある。笛と琵琶と競演する新作の「耳なし芳一」上演に気合いが入る山根さんだった。